

=====

GCOE NewsLetter
[No.23 2009/8/21]

平成21年度第1回gCOE論文賞の募集について
平成21年度第2回大学院学生海外派遣事業について
gCOE国際研究集会の開催について
gCOE講演会のお知らせ
「テキスト布置解釈学原論」の要約
「テキスト布置解釈学原論・特別講義」の要約
「テキスト布置解釈学各論」の要約
バルテルミー教授gCOE講演会の要約
gCOEスタッフ海外出張報告

=====

■ 平成21年度第1回gCOE論文賞の募集について

gCOEでは論文を募り、優秀な論文を「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2010年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。受付期間は8月28日（金）～9月7日（月）16時半です。詳しい応募方法については下記のgCOEのWebページからご覧ください。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/>

■ 平成21年度第2回大学院学生海外派遣事業について

平成21年度グローバルCOE「大学院生海外派遣プログラム」の第2回募集を行います。受付期間は9月28日（月）～10月5日（月）の予定です。詳しい情報は今後グローバルCOEのWebページに掲載します。

■ gCOE国際研究集会の開催について

第7回国際研究集会「Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL 6)」

期間：8月29日（土）、9月4日（金）～6日（日）

場所：名古屋大学（文系総合館7階カンファレンスホール、野依記念学流交流館）

第8回国際研究集会「日本語テキストの歴史的軌跡—解釈・再コンテキスト化・布置—」

期間：9月3日（木）～5日（土）

場所：プラハ・カレル大学（チェコ）

■ gCOE講演会のお知らせ

イレーヌ・ロジエ＝カタシ教授（パリ第7大学、高等研究院 (EPHE)）

題目：Intentions, conventions, performativity: medieval discussions about sacramental formulas and oaths（「意図、慣習、言語的遂行性。聖別定式書と宣誓に関する中世の諸議論」）

日時：2009年9月24日（木）午後5時より

場所：文学研究科大会議室

使用言語：英語

■ 「テキスト布置解釈学原論」の要約

Toru Kuginuki

“The phenomenological genealogy between TOKIEDA Motoki ‘language, as a action process’ and ARISAKA Hideyo ‘sound, as an idea of pronunciation’” (July 9 and 16)

Japanese language study has a couple of main streams. One stream is traditional method since 12th century. And other one is western linguistics. Traditional method had been Teniwoha and Kanazukai. The origine of Teniwoha is Teniha-Taigaisyo, and the one of Kanazukai is Gekansyu by Fujiwaranoteika. Tniwoha and Kanazukai had been the main frame of Japanese classic study. This study was shouldered by the urban literary aristocrat and noble Samurai, urban military nobility. This study had continued from Kamakura period to the first half of Edo period, 17th century. For the future from second half of Edo period, the academic support of cutting edge shifted to provincial samurai from traditional urban aristocrat and noble Samaurai.

In Edo period 18th century Teniwoha changed to the Kakarimusubi (Teniwoha-Himokagami, Kotobano-Tamanowo) by MOTOORI Norinaga, Katsuyo (conjugation) by SUZUKI Akira (Katugo-danzokuhu) and MOTOORI Haruniwa (Kotobano-yachimata). At the same time Kanazukai changed to the classical phonetics about old Japanese (Wajisyoransyto by Keichu, and Kand Jion-Kanazukai by Motoorinorinaga). The studies of second half of Edo period by provincial samurai was very demonstrated and rational and practical. Modern japanese language study directly depends on the study of this period which had prepared the modern scientific methods.

In this lecture, I notice the three Japanese scholars, YAMADA Yoshio, TOKIEDA Motoki, ARISAKA Hideyo. They strongly influenced modern Japanese language studies by their

characteristic theoretical contribution. They commonly criticized the new theoretical wave of western linguistics and tried for modernization of the traditional method of language study. They commonly depended upon modern german metaphysics for the definition of factors about language. Yamada referred Kant, Tokieda and Arisaka quoted Husserl. They competed the new theory of western linguistics. Commonly they were conscious of themselves for succeeding to traditional Japanese language studies. Yamada and Tokieda knew of succeeding Teniwoha tradition, Arisaka did of succeeding On-in study in Edo period. They insisted definition about object of observing. Yamada tried to define the sentence as a result of apperception. Tokieda insisted to define the language as a action process. Arisaka tried to define the sound as an idea of pronunciation.

■ 「テキスト布置解釈学原論・特別講義」の要約

ドミニク・バルテルミー教授

7月21日（火）4限（大会議室）

"The Peace of God: towards a reappraisal"（「神の平和」の再検討に向けて）

神の平和運動とは、司教が聖遺物などの聖なる力を利用して内戦により乱された領域内の秩序を回復する社会制度であるといわれてきた。セミションやホフマンらがつくりあげてきた通説では、そのような社会制度は989年のシャルー教会会議と994年のルピュイ教会会議を嚆矢とし、その流れが中世盛期のフェーデ解決へとつながるとされてきた。その根底には、キリスト教会の平和志向的宗教メンタリティが封建騎士の行動様式を変容させたとする理解があった。

しかしながらバルテルミー教授は、従来利用されてきた史料の再検討と北フランスにおける事例の精査により、以上述べた通説を大胆に批判する。司教たちは聖遺物を掲げてキリスト教的心性を内戦の当事者たちから引き出したというよりも、説教を通じて騎士を集め、彼らの武力を背景に領域内に秩序を回復したとする。司教は制裁手段として破門という宗教的武器をもっている。

1070年のルマンの事例に見られるように、11世紀になると北フランスに宣誓によって結ばれる都市がつぎつぎに生まれた。そしてそうした都市は内戦のさいにしばしば領主の攻撃を受けることになる。そのとき都市は自身が属する管区内の司教と協力して内戦の被害から自己防衛する。キリスト教的道徳が色濃く反映された中世の騎士社会を生み出したのは、従来言われていたような神の平和運動ではない。特定教区内で行われた都市市民による宣誓に基づく北フランスのコミュン運動こそがその原動力である。

（小澤実）

■ 「テキスト布置解釈学各論」の要約

各論II 阿部泰郎(6/17, 7/1, 7/8)

宗教の所産としての聖典(キャノン)や尊像(イコン)は、それを宗教という超越的な〈聖なるもの〉をまなざす運動を生成するテキストとして普遍化することにより、その担うところの意味や機能を時代の制約をこえて解釈することが可能となると思われる。いま、その解釈の枠(マトリックス)としての目録というテキストを媒介として、その布置を探ろうとする。

古代から中世にかけての諸宗の大寺院において、それらの宗教テキストの場である経蔵は、如何に形成され、また変化を蒙って再構成されていったか。その適時的変容と展開およびかきとなる時点での共時的構成とその配置の状況は、遺された目録によって立体的に把握することが可能である。

今次の講義では、第一に日本密教の形成を担った入唐八家の一人、天台宗の円珍が三井寺に遺した各種の請来目録を通覧し、それが最終的に山王院経蔵目録として体系的に構築される生成過程を追跡した上で、後に祖師像と目録が一体化して祀られる事例を紹介する。第二に、真言密教の国家寺院である東寺において、真言宗の空海が請来した仏舍利と三十帖策子を中心に、後七日御修法などの国家修法と結合した宝蔵のテキスト体系が如何に形成展開したのかを、寛信の写した東寺一切経目録や杲宝による『東宝記』により復原し、更に中世に至り西院御影堂を拠点として構築された内陣経蔵のテキスト体系の寺内法会儀礼と複合した形成過程を跡付ける。第三に中世真言宗の展開を領導した三宝院流の拠である醍醐寺三宝院経蔵について、院政期に元海-実運-勝賢の三代にわたり形成された経蔵目録を分析し、当時の王権の動向と密接に結びついて形成された経蔵の全体像が明らかになりつつある。その考証過程をドキュメントしつつ、テキスト解釈の可能性を探る。

各論IV 森際康友、長尾伸一、クレール・フォヴェルグ

- 第1講 序：講義概要(4/16)

講義の概要紹介および解釈学史の素描を長尾、フォヴェルグ、森際で行った。その内実は以下の通りである。

- 第2講 解釈学とは何か(4/23)

解釈学がテキスト解釈の技術の学から、近代哲学の隘路を越えうる世界観を提起できる言語観、存在論を提供しうる問題構成に発展した。すなわち、主体客体の二元論的構成から、そのような二元論の構造を明らかにする原初的問題場面、解釈する営為という場

の発見に至った。森際が、ガダマーの解釈学に至る途について、シュライアマッハー、ハイデッガーの仕事のこの観点からの評価を交えつつ、言語論的、存在論的転回がどのように主客の二元論的構成を対象化しつつ超えていくかを解説した。

- 第3講 プラトーン『パイドロス』の場合(4/30)

プラトーンの『イオーン』、『パイドロス』を題材に、フォヴェルグがプラトーンに見受けられる古典古代の解釈学の一側面を考察した。分割と総合を行う対話術 *dialektike* によって魂の本質を明らかにし、癒す作業。これは詩人の魂も知も技術ももたない俳優、演奏者や朗読者イオーンにも可能か。身体の本質を明らかにし、癒す医師の営みと比較しつつ考察。

- 第4講 偽アリストテレス『夢について』(5/7)

アリストテレス『夢について』を題材に、フォヴェルグがアリストテレスにおける解釈学を考察した。この作品 *De la divination dans le sommeil, De divinatione per somnum* はその真贋が争われていたが、現在では真作とされ、『夢における真実について』と題されていることが多い。正夢の原因は神か？否、犬でも夢を見る。身体の出来事である。イオーンに通じる。真実は知も技術もないイオーンでも、夢見る人でもわかる。

憂鬱質の人は夢を見ることが多く、正夢が多い、とされる。魂がおしゃべりな人だから。ロゴスではなくイメージの力を借りて。知より強い神が、原理を与える。

憂鬱者の夢の中で関係のない者同士が並置され、その布置が暗喩を呼び起こす。ここで、本来イメージに過ぎないものに、修辞学的解析——解釈——が行われる。夢の解釈。

19Cにフロイトがこのアリストテレス学説を研究して、『夢の解釈』を執筆。イメージをヒエログリフに喩える。

- 第5講から第7講 Bacon, Spinoza, Leibniz, Hobbes (5/14, 21, 28)

近代の解釈学について考察を始めた。

長尾は、近代科学の成立におけるオカルト学や魔術の役割の再評価を進めている近年の科学史研究を踏まえて、近代科学観の成立を、自然という書物を解読する営みとの観点から再解釈することを試みた。ニュートンにいたるまで、ヨーロッパ近代の科学者たちは、ルネサンス以来の失われた古代の英知を求める運動の中にいた。聖書解釈が引き起こした宗教改革以後の動乱を経て、彼らは自然を書物にみたてて、その解読・解釈を行う形で、新たな自然観とその解釈方法を樹立するに至った。

通常帰納法とされるフランシス・ベーコンと、近代物理学の数理的、実験的方法を代表するガリレオの双方ともに、自然を人知の及ばない「迷宮」ととらえ、それぞれの方法をその中を旅していく道しるべを与えるものと考えていた。ニュートンの万有引力の法則は遠隔作用を認めるが、ニュートンはその原因を説明できなかった。ニュートンとラ

イプニッツとの論争では、ライプニッツが重力法則を説明できないことを難じたのに対し、むしろ説明できないこと自体を神の存在の証と（強弁）し、その自然解釈の正しさを主張した。ここには「人知では計り知れない自然」の観念を中心にして、現代的な「経験科学」の成立と、宗教、哲学との共存関係が見られる。

さらに、近代的科学観の神学的正統性を立証する作業が、自他共に重要なものとされた。ニュートンとライプニッツとの論争では、ライプニッツが重力法則を説明できないことを難じたのに対し、むしろ説明できないこと自体を神の存在の証と（強弁）し、その自然解釈の正しさを主張した。

（編集部より：後半の第8講～第14講の要約は次号に掲載します）

各論VI ゼーン・ゴーベル

この講義では、受講者に国際的な場における英語での研究発表の重要な側面に触れてもらった。受講者は、講義の最初の5週間で、学会発表の要旨の書き方、発表準備の仕方、英語での発表の重要な特徴、および聴衆からの質問に回答する上での方策について学んだ。講義の中で提示された具体的な学習目標は以下のものである。

口頭発表を行う自信を高めること

- ・ パワーポイントを用いた適切な学術的スタイルの発表を準備・構成することができる
- ・ 聴衆の注意を惹きつけ、それを維持することができる
- ・ 発表への適切な導入を行うことができる
- ・ 明瞭で構成に優れた議論を行うことができる
- ・ 視覚機材を有効に利用することができる
- ・ 発表を終えるに際し、適切な結論を提示することができる
- ・ 発表終了時に、適切な疑問を喚起することができる（つまり発表は、十分に興味深く、

聴衆がもっとよく知りたいと思うようなものでなければならない)

- ・ 聴衆からの質問に答えることができる

第5週以降、全受講者に自らの研究に関するパワーポイントを用いた20分の発表の準備を始めるよう求めた。各者、まず導入から着手し、続いて研究の理論的・方法論的背景、実際の或いは提案する研究方法、データについての議論、および結論についての節を付け加えた。毎週、準備ができた部分を発表する機会を設けたため、受講者には発表練習の機会を概ね5回与えることができた。そして最後の3週間で、全員にパワーポイントを用いて最終的な発表を行うことを求めた。この最終発表を対象として、受講者に対し100点を満点とする評価を行った。

- バルテルミー教授gCOE講演会の要約

7月14日（火）16時～17時30分 名古屋国際センタービル15階GCOEオフィス

"The Beginnings of European Chivalry (XIIth century)"（ヨーロッパにおける騎士身分の発端）

バルテルミー教授の2回にわたる講演の目的は、ヨーロッパと日本における騎士（武士）身分の比較にあり、第1回目の講演ではヨーロッパにおける騎士身分の特徴を明確にするとともに、その形成のプロセスについて教授独自の見解を披瀝した。その内容はすでに3回の講義において詳しく紹介されたので、バルテルミー教授は繰り返しを避け、講義で取り上げなかった史料を用いて、いわゆる封建的無秩序の中からではなく、10世紀さらにはそれ以前からの流血を避ける傾向を有していた戦いの中から、敵に敬意を払いながらも個人的武勇を目指す騎士の社会が生まれてきたとする「1100年頃の変動」という自説を補強した。

講演後の質疑応答では、なぜフランスで騎士身分が発展したのか、カロリング期に騎士身分の成立を唱えるバルテルミー教授がなぜ12世紀における騎士身分の成立を語るのか、カロリング期には敵を殺害する記述が多いのに、なぜ10世紀以降には敵を容赦する記述が増えるのか、などの問いが投げかけられた。質疑応答によって、ヨーロッパにおける騎士身分成立の具体的なコンテクストがいっそう明瞭にされたことを、参加者の一人として喜ぶたい。

講演後は、同オフィスにおいて懇親会が開かれ、西洋中世史を専攻する学部生や院生、他分野の研究者らと交流が持たれた。

（加納修）

7月22日（水）18時～19時30分 名古屋国際センタービル15階GCOEオフィス

"Noble Warriors of Japan and France in the XIIth and XIIIth centuries"（12、13世紀日本とフランスの高貴なる戦士）

ヨーロッパ中世の騎士と日本中世の武士の類似性は古くから指摘されてきたが、かつての研究はジュオン・デ・ロングレのそれを含めて、類似性を強調する傾向が強かっただけでなく、また「封建制」システム概念を用いて比較を行ってきた。これに対してバルテルミー教授は、根本的な相違の存在を認めた上で、英雄的な理想や社会的な機能において、日本とフランスの騎士（武士）に共通する部分が見られるとする。『ローランの歌』のような武勲詩におけるのと同じく、『平家物語』にも高貴な戦士の地位を安定

させ、戦士集団内部の位階秩序を維持するのに役立つような作法が確認できるだけでなく、フランス中世におけるように、高貴な敵を尊重する態度が存在し、敵対者同士の間で社会的な関係が重視されていたことを強調する。比較の枠から「封建制」という概念を取り払い、とりわけ社会的な関係に焦点を定めることによって、比較史研究の新たな可能性が開かれたと言えよう。

バルテルミー教授は講演の最後に騎士と武士の相違を歴史的に説明するための手がかりをいくつか指摘した。質疑応答ではとりわけ日本中世の武士身分の独自性が参加者から指摘され、バルテルミー教授とのあいだで、騎士と武士の相違について活発な議論が交わされた。

(加納修)

■ gCOEスタッフ海外出張報告

ゼーン・ゴーベル (gCOE事業推進担当者・言語学) (2009年7月11日～22日)

まず最初に、メルボルンで行われた国際語用論協会(IPrA)第11回大会に参加し、またジェームズ・クック大学(オーストラリア、タウンズヴィル)を訪問する上でご助力下さった、グローバルCOEプログラム、文学部、学部事務の皆様にお礼申し上げたい。

IPrAでは、「インドネシア都市部の移行的状況における社会的行動、スモールストーリー、アイデンティティ」と題する発表を行った。この発表は、私が大阪大学の研究者と共同企画したパネル「通文化的/多文化的状況における記号論、アイデンティティ、ナラティブ」の一部として行われた。パネルは大会初日の午後に行われ、会話的ナラティブ分野の著名な研究者であるMichael Bamberg教授など、25名程度の出席者に恵まれた。また、大会では多くの以前から面識のある研究者たちに再会するとともに、欧州、アメリカ、カナダの諸研究者と新たに知己を得ることができた。例えば、カナダ、サイモン・フレーザー大学のCecile Vigouroux準教授とは、イギリス、サウスハウプトンで2010年に開催される社会言語学シンポジウムでのパネルの編成について話し合った。移住者、多言語使用、言語移行についての学術誌特別号の編集についても話し合ったが、この件ではシカゴ大学のSalikoko Mufwene 教授からもコメントがあるだろう。また、会期中、Robert Englebretson教授(アメリカ、ライス大学)とMichael Ewing教授(オーストラリア、メルボルン大学)に、インドネシアにおける会話的ナラティブについての学術誌特別号への寄稿をお願いすることができた。この特別号は、Novi Djenar教授(シドニー大学)と私が現在準備しているものである。IPrAの間には、バルセロナ自治大学のMelissa Moyer教授から、イギリスに本拠を持つ出版社であるMultilingual Matters

に私のインドネシアの官庁における研究についての本の企画を提出するよう、促された。

タウンズヴィルでは、再度Peter Burns名誉教授から、インドネシアにおける民族性について、そして、インドネシアにおける若者と言語の歴史的結びつき、またそれが後期オランダ植民地時代の終焉以来の特定の政治情勢とどのように関係しているかに関する可能な研究計画について助言を得ることができた。またジェームズ・クック大学では、Rosiat Henry準教授と新設のケアンズ研究所によって行われる言語研究に関して話し合った。この研究所は、熱帯地方の民族と人々に焦点を絞った研究センターである。Henry準教授には、昨年私が氏の学科の客員研究員であった際の研究業績の詳細を、Journal of Sociolinguistic誌に掲載予定の論文を含め、渡すこともできた。

次回のメール版NewsLetterの発行は2009年9月中旬を予定しています。

•

..... •

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.23

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2009 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

•

..... •